巻頭言

「天文学会のさらなる発展を目指して」

田　原　博　人
〈宇都宮大学教育学部　〒321-8505宇都宮市峯町350〉

ここ数十年で世界のトップレベルに踊り出た我が国の天文学も生命と宇宙の世紀と呼ばれる21世紀を迎え，さらなる飛躍が期待されている．こうした状況の中にあって，天文学会がどう関わっていくかは重要な課題である．結論は容易に得られないかもしれないが，今世紀最初の理事長として，学会の役割を考えてみたい．

天文学会の主目的は天文学の発展と普及に寄与することにある．活動の中心は学会誌「天文月報」の発行，研究発表の場としての年会とPASJの刊行がある．天文月報には多様な記事が掲載され読み応えのある内容になってきたが，さらにわかり易い内容に努め多くの学会員が共に親しめるものにしたい．昨年の秋季年会は7会場で若い研究者を中心に数多くの発表がなされた．かって年会をパラレルにするかどうかで大議論したことがあったが，なんとなく懐かしく思い出された．多くの会場に分散することも学会の発展の結果であろうが，研究そのものが蛸壺的にならないことも大切である．PASJの充実は大きな課題である．本学会のジャーナルを育て発展させる責任は我々自身にあることを考え，投稿先の見直しも含め，多くの優れた論文が掲載されるよう会員の協力をぜひお願いしたい．

野辺山宇宙電波観測所の建設の後，すばる望遠鏡が稼動し，いよいよ本格的な成果を世に問う時期になった．また近い将来の完成を目指し，アンデス巨大電波望遠鏡の計画が進んでいる．さらには，X線や赤外線を含め多くの分野で各種のプロジェクトが目白押しとなっている．こうした大規模装置の実現が急務であることはもちろんであるが，天文学に巨大な投資をお願いしていることの責任を考えなければならない．いろいろな機会を活用して，納税者に納得いただけるよう，社会に向けてその意義を積極的に説明していくことも必要である．また，得られた成果を広く社会に還元し，国民に夢と活力を与えることができるのも天文学なればこそと考えると，その責任も重いものがある．

これらの計画を実りあるものにするためにも，研究者の量的拡充と研究環境の向上により，天文学の基盤を一層強固なものにしなければならない．国立大学は厳しい定員削減が押し寄せ，道が一層狭まっている．こうした中で研究者として活躍できる場を広げていくことは容易なことではない．そのためには，どこにあっても研究活動を推進することができるよう環境を整備することが大切である．また，最近の大学審議会等の動きにみられるように，研究者であると同時に教育者としての資質が強く要請されている．若手研究者にあっては，このような事情を良く理解され，単に天文学の研究実績を磨くだけでなく，科学観や自然観に対する幅広い見識をもち，教授内容や方法を磨くことにも心掛けることが必要であろう．すぐれた若手研究者を抱えている本学会としても，その存在を広くアピールするなど活躍の場の拡大に向けてどこまでかかわれるか考えてみたい．

理科嫌いがさけばれて久しいが，幸いにも子どもも大人も天文・宇宙には大きな関心を抱いている．天文学は，これを契機にして，さらに科学一般への興味や関心を広げていくことができる立場にある．本学会はこうした面にも経験豊かな研究者を抱えており，今後もその活躍が期待されるところである．昨年春の年会でのジュニアセッションが成功をおさめ，今年も引き続き実施されることになっている．こうした試みも大切にしていきたい一つである．また科学の魅力を引き出す各種教材の作成も重要な役割であり，引き続いて力を入れたいと考える．

以上考えることを述べてみた．容易なことではないかもしれないが，多くの方々の批判と協力を得ながら，学会のさらなる発展と夢の実現を目指していきたい．